

# 英 語

直 寄 宏 美 江 藤 里 佳 乗 富 章 子  
池 田 絵 里 笹 山 明 夫 水 野 郁 代  
安 田 一 志

英語は多くの国や地域で用いられている言語の一つで、現在では世界共通語ともいわれている。また、多くの人々が用いているからこそ、そういった人々と思いを伝え合う手段としての英語は、とても有効である。

今後、世界の人々との交流がこれまで以上にさかんになることが考えられ、小学校教育に英語を取り入れていくことは、現在以上にその必要性が高まり、取り上げる内容や指導方法を考えていかなければならない。

## 1 これまでの取り組み

本校では、8年前から英語の活動に取り組んできた。英語活動を本校の総合的な学習の時間（総合学習）の中に位置づけ、英語を用いた会話をその活動の中心としてきた。その間、英語活動を通じて、素直に自分の意志を伝えるために、言葉などの手段で表現し合うこと、つまり、コミュニケーション能力を身につけることを目標としてきたのである。

数年前までは、ALT 2名、年間約10時間だった活動の時間を、3年前には中学年以上を対象に20時間に増やした。2年前にはALTを4人に増員し、全ての英語活動の時間をALTとともに進めることができるようにした。それは、native speakerの英語に直にふれる機会をより多く確保することを大切にしたいとの考えからである。そして、昨年度は、ALT 5名で年間30時間（低学年は15時間）を確保し、「コミュニケーション能力の基礎」を養うことを目標に活動を行ってきた。

このように、ここ数年で英語の学習の時間数を増やしていくとともに、全ての活動をHTとALTのTTで指導できるような体制にしてきた。そして、その具体的な内容についても年間指導計画に基づいて、ALTのアイデアも取り入れながら活動を進めていくようにした。

その一方で、ALTの個性を生かしたTTのあり方や、年間計画作成にかかわって取り上げる活動内容の順序性などが課題として挙げられるようになった。

## 2 英語の目標

先に述べた経緯や課題を考えた上で、今年度

の英語の目標を次のように定めた。

英語による会話を中心とする活動を通して言語に対する理解を深め、世界の人々と積極的にコミュニケーションをとろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う

小学校段階で英語を取り上げるとはいても、現段階でnativeな発音をさせたり、正しい構文を教え込んだりすることを、私たちは第一の目的としているわけではない。ここでいう「言語に対する理解」とは、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の活動によって、普段自分たちが用いている日本語と同様に、英語によるコミュニケーションも、自分の思いを伝え合う一手段としてとらえさせたいと考えているのである。ここでは、単に普段ふれることの少ない英語を用いた会話への興味・関心を持たせることを意味するだけでなく、外来語とは異なる発音や日本語による日常的会話が、英語表現になることによって生じてくる英単語や構文を「知りたい」という知的好奇心をもたせることが大切である。

私たちは、子どもができるだけ自然な形で無理なく英語に慣れ親しみ、活動にすすんで参加する姿をめざしている。そして、英語に興味を持ち、活動を楽しもうとする態度を育むとともに、言葉や文化についても関心を持ってほしいと願っている。つまり、私たちがとらえる「コミュニケーション能力の基礎」とは、「子どもが自然に英語の世界に入り、自分の思いを伝え合うことに必要な能力や態度などを自ら身につけていくこと」である。

## 3 今年度の活動

### (1) カリキュラムの編成にあたって

上記の目標を受け、年間指導計画の作成にあたっては、子どもの発達段階を考慮し、以下をそれぞれの重点とした。

低学年 英語を聞くことや話すことに親しみ 英語への興味を育てる

低学年は、英語とはじめて出会う段階である

ことに配慮し、英語そのものに対する興味や関心を持たせることを重視する。自分のことや身近なことから、子どもにとって親しみのある事柄を取り上げ、英語を用いたコミュニケーションを図れるようにする。

中学年 英語で話したり聞いたりすることに親しみ 英語への興味を育てるとともに 英語を聞いてその内容を理解しようとする

低学年の英語活動を土台として、コミュニケーションに対する積極的な態度の育成を重視する。取り上げる言語の使用場面やその働きに配慮した活動を行う。簡単な英語を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り入れる。

高学年 英語で話したり聞いたりすることに慣れ 英語を聞いて理解することや話そうとする意欲や聞いたり話したりする能力を育てる

中学年までの学習を基にして、言語の使用場面やその働きをさらに広げた活動を行う。自分の伝えたいことなどの中から、コミュニケーションを図れるような話題を取り入れる。

いずれの学年においても、英語を用いた活動の楽しさを、十分に味わわせることを大切にしていける。そのために、次の二点に留意したい。

- 英語を用いて、自分のことを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行うとともに、取り上げる言語材料についての定着を促すために歌やゲームなどの活動を効果的に取り入れる。
- ゲームなどの活動の場では、具体的な場面や状況に応じた必然性のある活動場面を設定する。

活動の中心は聞いたり話したりすることであるが、子どもは音声を学べば、それに伴う文字にも自然に興味を持っていくであろう。子どもの興味や活動内容に応じて文字を読んだり書いたりすることも取り上げていきたい。中学年においては国語科のローマ字学習と併せて、文字指導を取り入れていく。高学年においては音声による指導を行う中で、「読むこと」や「書くこと」の活動を子どもの実態に応じて段階的に取り入れていく。

## (2) 運用について

今年度は、英語の時間をさらに増やすことにし、年間35時間（低学年は20時間）として年間指導計画を作成した。その編成にあたっては、子どもの発達段階を考慮し、各活動はその時間のテーマによって進められるようにした。低学年では1時間1テーマを基本として、身近

な素材を取り上げている。中、高学年になるに従って、一つのテーマを複数時間にわたって繰り返すこともある。

このような学習をすすめると、取り上げる単語数は多くなり（800語程度）、子どもはシャワーのように英語を浴びることになる。その中で、子どもにとって興味のあることや言い回しなどが一つでも使えるようになれば幸いしたい。挨拶や学習した構文や単語が自然に子どもの口から出てくることを期待する。基礎的な構文や単語（例・I like ○○.はほぼ全学年で取り上げ、○○にテーマに沿った単語を扱うことになる）は、学年をまたがって、段階的に繰り返し取り上げることにしている。同じ言葉や表現に何度も出会うことで、子どもの中に、英語が「無理なく楽しく」入っていくと思われる。

## (3) 指導体制について

本校では、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標に、ALTとの会話を中心にした学習形態にしている。今年度、HTとともに指導にあたるALTは2人となったが、1週間の内、木曜日以外の午前中はいずれかのALTが在籍して、教材研究や準備、HTとの打ち合わせを行っている。原則として全ての英語の時間がTTで行われているため、その打ち合わせは活動内容や活動の流れを確認するだけでなく、TTについてはできるだけ具体的にHTとALTの役割の分担を決めることにしている。例えばゲームの説明はALTが英語で行うが、HTは子どもの反応を見て必要と判断した時にだけ日本語で補足の説明をすることや、会話の場面ではHTとALTがどのようにデモンストレーションをするかを明確にしておくことなどである。

子どもが英語に直にふれる機会を最大限に保障したいと考え、ALTはできるだけ日本語を使わないように、また、HTはできるだけ通訳をしないように心がけている。

## 4 コミュニケーション能力の基礎を養う学習へのアプローチ

### (1) 学びのシェアについて

一般的に英会話は少人数での学習が効果的であるといわれている。2人での会話練習でも英語にふれ、互いの意志を伝え合う楽しさを感じることは可能である。しかし、私たちの考える英語学習における集団で学ぶよさとは、多くの友達と共に学ぶ場で、それぞれに対する話し方や聞き方をしたり互いのよさを認め合ったりすることで意欲が喚起され、よりよいコミュニ

ケーションの仕方を学び、その喜びを実感することができることである。さらに英語に対する自分の思いやその表現方法を広げていくことができる。また、会話ゲームなどの活動の中にもコミュニケーションをとるために重視されるルールやマナーがあることや大きなジェスチャーを交えていくことが効果的であることも感じ取れると思われる。

これまでの学習で私たちがめざしてきた子どもの姿は、「英語に興味をもち、英語を用いた活動にすすんで取り組む姿」である。例えば、英語の歌を身ぶりを入れながら歌うことや、ゲームの仕方を知り、そのゲームをするために必要な英語をすすんで使うことなどである。そこで、「聞くこと」「話すこと」の場をより多く保障することに留意していく。ALTやHTから示された英語を友だちと語り合ったり聞き合ったりする場面を多く設定し、子ども同士がかかわる場を大切にしたい。そのことが英語に対する自信を深めることにもつながる。

つまり、ALTとの会話、友達同士での会話ゲームやインタビュー活動を中心とすることで、日本語とは異なる言葉の雰囲気を楽しむことができるだけでなく、習慣・マナーなどをみんなと学んでいくことができるのである。このような活動を通して、子どもは英語を単なる言語学習の知識獲得の対象としてだけでなく、自分の思いを相手に伝える手段の一つとしてとらえることができると考える。そして、それをいかした場面や会話を用いたゲームなど、子どもにとって楽しいと感じられそうな活動を設定していくことで、子どもはすすんでみんなとの活動に参加しようとするだろう。

## (2) 学びを高める規範について

ALTのデモンストレーションを聞く（見る）、ALTの後について言う（話す）、会話ゲームやインタビューなどの学習を繰り返して行うことにより、内容の理解だけでなく、態度が培われていく。英語学習では、本校児童に求められ、かつ、学校生活全般にわたって必要とされる、自分を表現するための、相手の立場に立った「聞くこと」「話すこと」の態度を中心とした規範形成の一翼を担うことをめざしていきたい。そのために以下の点に留意していく。

一つ目は、「聞くこと」「話すこと」への働きかけを促すことである。子どもが英語に無理なく自然に取り組むことができる活動の場を提供する。子どもの興味・関心を引き出し、もっと聞きたい、もっと話したいと感じさせるような楽しい活動づくりを心がける。そのためには、子どもにとって身近で無理のないテーマ

やゲームなどの活動を工夫し、自分のことを自分で表現できるようにすることが大切である。ゲームそのもの楽しさにふれながら、自分の欲求を満たし、英語に親しんでいけるようにしたい。

二つ目は、「ひと」とのふれあいを大切にすることである。いうまでもなく、コミュニケーションの相手は「ひと」である。子どもが英語活動でかかわる「ひと」は、ALTでありHTでありクラスの友達である。ALTとは、一人一人と挨拶をする、握手をする、頻繁に言葉をかけるなど積極的に子どもとかかわる場を設ける。HTは子どもの実態や個性を把握している立場で、その場に合った一人一人への支援や働きかけを多くしていく。

## (3) 評価について

今年度、私達が特に大切にしたいのは、子どもがコミュニケーションをいかに積極的に楽しもうとしたかという態度や意欲面での評価である（以下の表を参照のこと）。

表 評価観点と発達段階による内容

	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力
低学年	英語に親しみをもち、すすんでコミュニケーションを図ろうとする	身近な英語を用いて、挨拶や自分のことを話したり、英語を聞いて、そのおおよそのことを理解する	
中学年	英語に関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする		
高学年		初歩的な英語を用いて、自分のことや伝えたいことを話すことができる	初歩的な英語を用いて、相手の伝えたいことを理解することができる

そのふりかえりが後の活動に役立つように、教師が十分な検討を加えて子どもに返していきたい。例えば、学期の終わりの時間にそれまでに出会った表現をまとめて使うなど、ある程度の期間をおいて残ったものを確かめる方法や、新しいテーマで学習に取り組む際に、これまでに得た英語表現に新しくいくつかの表現を加えてみる方法などである。そうすることで、英語活動の積み重ねを意識するとともに、自分の学びのよさを自覚し、自信をもって次の活動に臨むことができるようにしていきたいと考える。

## 5 実践例 — 3・4年複式 —

本学級は、新たに転入してきた3年生と4年生の複式である。4月当初、3年生はこれまでに英語の言葉を読んだり、会話をしたりすることが少なかったせいか、語彙が少なく声もとぎれがたで、会話を楽しむまでにはかなり時間を要するのではないかと感じられた。3年生に対して英語が好きかどうかをたずねてみたところ、半数近くが「きらい」「苦手」「難しい」と回答した。そこで3年生に対しては、ALTの発する言葉を多く耳にして、できるだけ真似をしながら発音したり、アルファベットの読み方を毎回ていねいに復習したりする場を設けてきた。また、4年生にアドバイスをもらったり、ゲーム感覚で英語に親しんだりするような活動を取り入れてきた。その結果、3年生の英語に対する抵抗感が少しずつ薄れ、楽しみながら活動に参加する姿が見られるようになってきた。

一方、4年生は昨年までの英語活動を通して簡単な会話やゲームを楽しむ経験を積んでいるため、読む声も大きく表情も豊かである。また、自分が3年生にアドバイスすることが、英語に対する自信につながり、教えてあげることで人とかかわることの楽しさを感じることができるようになってきている。

### (1) テーマ どうしたの？（相手の体調や気分を表す言葉）

- (2) ねらい
- ・体調や気分をたずね合う言い方を相手とかかわりながら表現することができる。
  - ・体調や気分を表す言葉の文字を見ながら読んだり、ゲームの中で文字を意識しながら会話を楽しむことができる。

### (3) テーマ設定について

英語によるコミュニケーションは、自分の思いを伝え合う一手段であり、これまでも会話中心の活動を展開してきた。本学習では、体調や気分をたずね合う言い方を取り上げる。相手の様子を見ながらたずねたり、答えたりする内容であり、相手を意識する場面が設定されることになり、これまでの学習以上に表現力が要求されるだろう。自分の様子や状態を言葉だけでなく、表情や動作なども通して相手に伝えることを学ぶよい機会にしたいと考えている。

複式学級の子ども達は、比較的英語の語彙が豊富な4年生と英語学習の経験が浅く自信があまり持てない3年生が混在した学級である。これまでの学習では、ALTの発音を聞きながらできるだけそれに近い発音をしようとして繰り返し練習をしてきた。中でもアルファベットA～Zの発音はかなりなめらかになってきている。しかし、相手との会話になると3年生を中心に緊張して言葉が出なくなりがちである。したがって、体表現なども取り入れて無理なく楽しく会話に参加できるようにしたいと考えている。

また、繰り返し練習することから生じる安心感を通して、文字を意識する場面も取り入れていきたい。アルファベットについては、ほぼ文字を見るだけで発音できるようになっていくし、曜日についても何となく読めるようになっていく。これらのことを生かして、子どもが文字を意識しながら発音したり、会話をしたりすることができるようなゲームやワークを取り入れ、文字が読める楽しさも感じるようにしたいと考える。

### (4) コミュニケーション能力の基礎を養う学習へのアプローチ

#### ① 学びのシェアについて

英語学習の目的は、コミュニケーションの基礎を養うことであり、それは単に言語の習得を目ざしているわけではない。ALTとの会話や、友だち同士の会話やゲームを通して、人とかかわりを学ぶことも大切である。本時では相手の体調や気分をたずね合うことを通して相手の状態を理解しようとする姿を学びのシェアととらえたい。その過程として、まず、ALTとともにくり返し発音練習をしたり、小集団による会話練習を促したりすることにより、会話の内容をつかむことができるようにする。次に、“ONIゲーム”を通して文字の並びを意識させ、楽しく、何となく読むことができるようにしたい。さらに、文字を読むことを通して会話をするゲームをすることによって、自ら楽しく相手にかかわろうとすることができるようにする。そして、小集団や全体の中で会話を通じた喜びを確かめ合ったり、文字の配列を見つけてなぞり書きをしたりする場を設けたい。これらの活動を通して、無理なく文字を意識した学習を展開したいと考える。

#### ② 学びを高める規範について

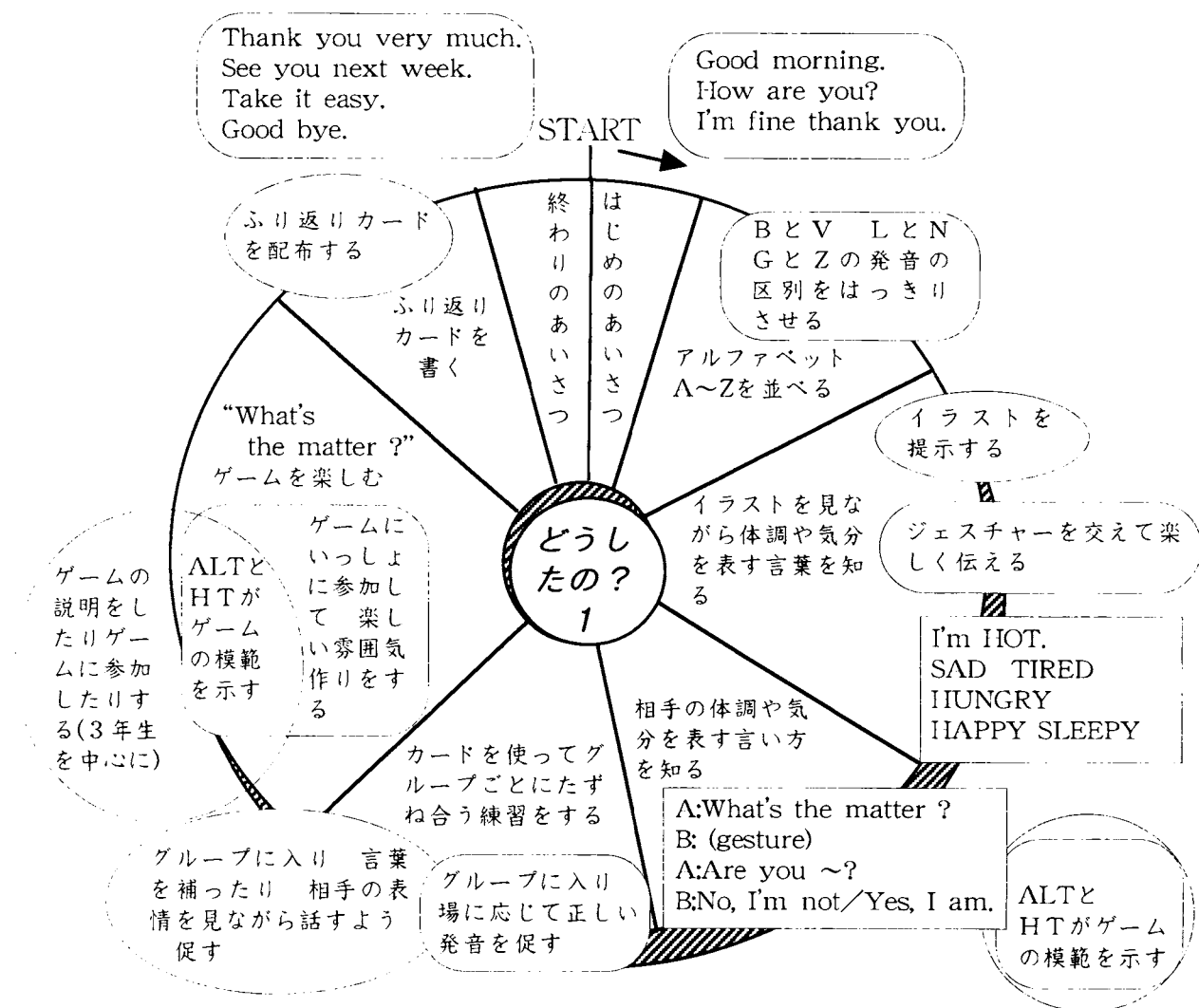
あいさつの場面では、相手の目を見ながら声をかける。発音の練習場面では、ALTの口の様子

を観察しながら聞いて真似をする。小集団の中では相手の体調や気分をたずね合う会話の内容やゲームの成果を確かめ合ったりする。こうした学習過程を通して、相手の状態を自分なりに推測しながら言葉をかけようとする態度が培われていくと考える。こうした学習過程を成立させるために、ALTは、テンポよく子どもに言葉や文字の発音を促したり、ゲームに参加したりして楽しい雰囲気作りに努め、子どもと積極的にかかわるようにしたい。HTは、子どもの様子を観察しながら適切な言葉をアドバイスしたり、相手の表情を見ながら話すことの大切さを伝えたりしていくようにする。

### ③ 評価について

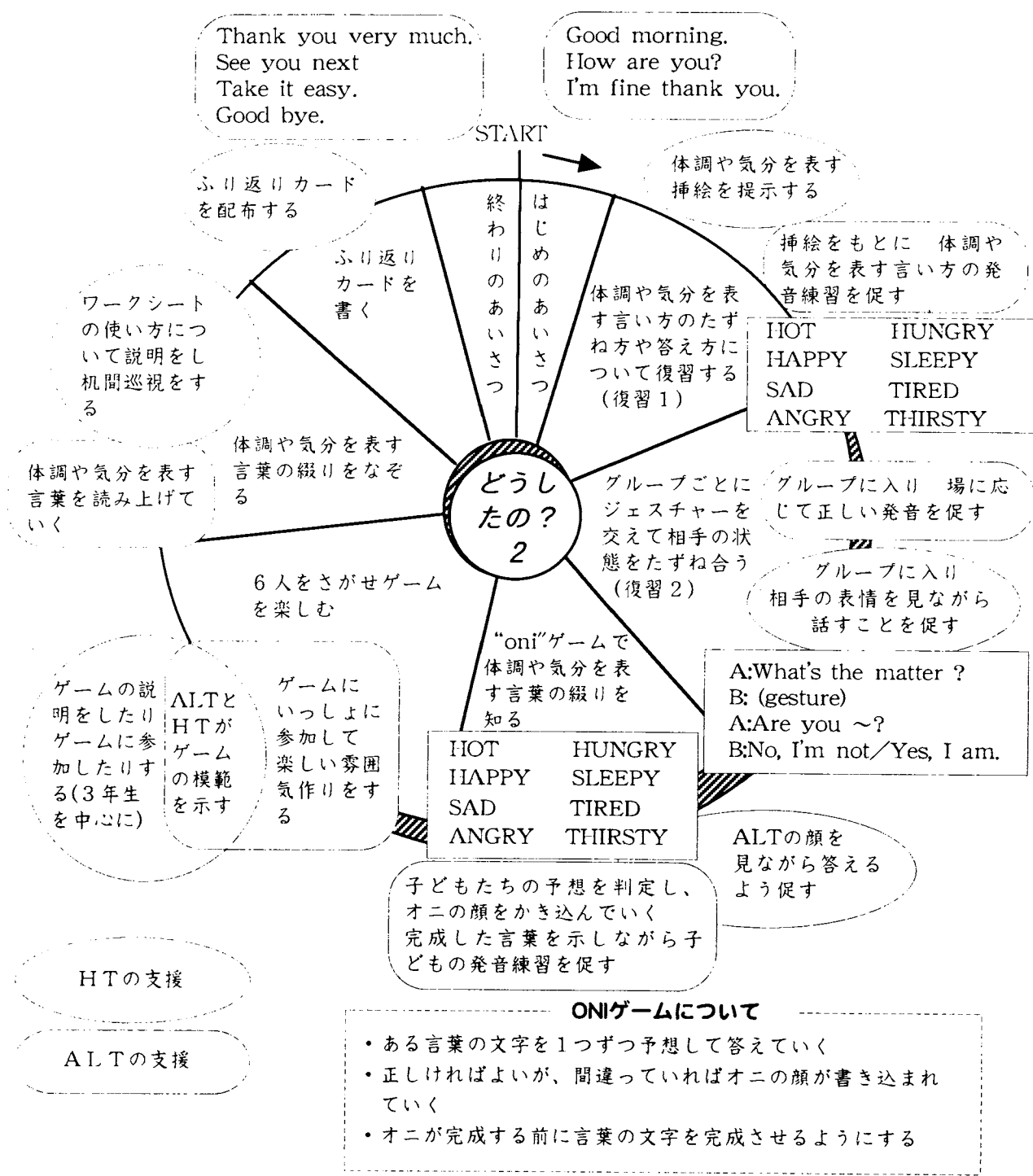
本時の学習において意欲的にコミュニケーションを楽しんでいるか、会話の内容が自分のものになっていたか、会話が通じ合っていたかについて、自分の学習をふり返る場を設けることにする。これらの自己評価を通して、本時の学習が子どもにとって無理のないものであったか、一つの学習活動が子どものコミュニケーションを支えていたか、集団で学ぶよさが発揮されていたかどうかを見る指標としたいと考えている。また、文字に対する意識の流れについても検証し、今後の文字学習に生かしていきたいと考えている。

### 活動計画（総時数2時間）



#### “What’s the matter?” ゲームについて

- 各班から1名ずつが前に出て「はえたたき」を持ってならば。ジェスチャー係に“What’s the matter?”とたずねる。ジェスチャー係の反応を見てどんな状態かをたずねる。
- ジェスチャー係が“Yes, I am.”と答えたら、後ろを振り向き、その状態を表す挿絵を探して、はえたたきでタッチする。一番速かった者の勝ちとなる。



- 6人をさがせゲームについて**
- 児童は体調や気分を表す言葉の文字を書いたカードを6枚もち、相手を見つけてじゃんけんをする。
  - 勝った子だけが“Are you hot?”とたずね、相手は、持っている場合は、“Yes, I am.”と答え、そのカードをわたす。持っていない場合は、“No, I'm not.”と答え、受け渡しはしない。
  - 同じカードがそろったら、「ばばぬき」のように2枚そろえて箱に入れる。じゃんけんにも勝った子も負けた子もカードは減っていく。
  - 決められた時間内にできるだけカードを減らすようにする。

## (5) 授業の実際と考察

本学習においては、子どもが意欲的に楽しくコミュニケーションに取り組み、ALTや友だちの表情を見ながら話したり聞いたりすることができるよう、手だてを工夫しながら進めることにした。以下学習活動の具体的な手だてと子どもの様子について考察していくことにする。

### ① 相手の体調や気分を表す言葉について知る

体調や気分を表す言葉を無理なく読むことができる

まず、相手の体調や気分を表す言葉をイラストを使って考えさせた。HOT, SAD, TIRED, HUNGRY, HAPPY, SLEEPYの6つである。これらのうちのいくつかは、英語の授業のはじめのあいさつのときにALTから“How are you?”と尋ねられて子どもが答えるときに使っている言葉である。従って無理なく読むことができた。また、ALTがその言葉が表す状態をユーモラスにジェスチャーで表しながら説明してくれるので、子どもはその動作を笑顔で見つめたり、時には真似をしたりしながら無理なく発音練習に取り組むことができた(写真1)。



写真1 イラストで説明するALT

### ② 相手の体調や気分のたずね方について知る

相手の表情を見ながら話したり聞いたりする(「ひと」とのふれあい)

相手の表情を見ながら話したり聞いたりすることは、コミュニケーションの大切な要素である。そこで相手の体調や気分をたずねる会話について学習を進めた。言葉やジェスチャーで相手の様子を伝え合う内容である(資料1)。初めての言葉や文を使う場合は、ALTとHTがデモンストレーションを行うようにしている。ここでは、言葉だけでなく、相手がどんな様子なのかをうかがうような動作や相手を気遣うような表情を大袈裟に取り入れながら行った。そうすることで子どもはALTとHTの表情や会話のやり取りを楽しそうに見つめていた。デモンストレーションは見通しを持つために大切であるとともに、会話を楽しむ雰囲気高めることにもつながる手だてといえよう。その後、ALTの後について繰り返ししたり、立場を決めて練習したりするなど、パターンを変えながらリズムよく練習を行うことで、少しずつ会話の内容に慣れてきた。

次に相手を意識しながら会話をできるようにグループで練習を行った。一人がカードを1枚取り、そこに描かれている絵の状態をジェスチャーで表し、みんなに予想してもらおうという内容である。尋ねる方は、相手のジェスチャーをよく見て尋ねなければならないし、答える方も聞きながら正解かどうかを判断しなければならない。子どもは、初めはジェスチャーで表現することに少し戸惑い気味で、「はずかしい」という気持ちが強く表れていた。しかし、周りの子どもが自分に注目し、真剣に見つめながら“Are you ~?”と尋ねてくるので、相手を見ながらしっかりと答えようとするようになってきた。一方、尋ねる方も、様子を言い当てるおもしろさから、意欲的に相手の表情や動作を見ながら答えようとする姿が見られるようになった(写真2)。

A : What's the matter ?
B : (gesture)
A : Are you ~?
B : No, I'm not/Yes, I am.

資料1 会話の内容

3年	4年
できた・11名	できた・11名
不十分・・1名	不十分・・1名

表1「相手の表情を見ながら話したり聞いたりできたか」に対する回答

表1によると、ほとんどの子どもは相手の顔を見ながら話したり、聞いたりすることができていたようである。少人数という形態が、話したり聞いたりしやすい雰囲気を作ることに繋がったと考える。不十分と答えた3年のA児や4年のB児は、緊張してうまく表現することができなかつたとふり返っている。

グループによる練習のもう一つのねらいは、少人数を生かしてアドバイスなどの形で子ども同士がかかわっていけるようにすることである。こうしたかかわりを「ひと」とのふれあいととらえている。今回は、イラストを見ても言葉や文が浮かんでこない、あるいは自信を持って話せないという子どもに対して、4年生が言葉を補ったり、ジェスチャーのよさを認めたりするなどの姿が



写真2 グループでの練習

見られ、どのグループも徐々に安心してながら会話の練習をすることができていた。先の3年のA児は、「はんでやれば、教え合いがたくさんできて、一人でやるよりもおぼえやすいです」と記述している。この子は、相手の表情を見ながら表現することには自信が持てなかったが、教えてもらえたということが本当にうれしかったようである。また、4年のC児は自分の発音が間違っていたことに気づき、直すことができたことを記述している。集団で学ぶことのよさを自分なりに考えることができる子どもが徐々に増えてきていると思われる(表2)。

ALTとHTもグループの中に入り、会話文を理解しているか、発音の様子はどうかなどについて子どもと顔を合わせながら様子を観察することにした。その結果、“What’s the matter?”の文の発音がやや不正確な子どもが多いこと、“Yes, I am.” “No, I’m not.”の文末をあいまいにすませてしまう傾向があることなどがわかった。文末まできちんと話すことはコミュニケーションの大切な要素である。そこで、ALTとHTは、その都度模範を示しながら正確な発音を心がけるよう促した。

ふりかえりの内容	3年生	4年生
班で練習してみてもよかったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少人数で言いやすかった</li> <li>・教えてくれたのでわかった</li> <li>・もっとなかよくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の発音を直せたこと</li> <li>・教え合い</li> <li>・聞きやすい</li> </ul>

表2 子どものふりかえり1

### ③ ゲームを通して会話を楽しむ

#### ゲームを通して「見る」「聞く」「話す」ことを楽しむ

グループでお互いに練習した会話をさらに定着させるとともに、「聞こう」「話そう」と思えるような楽しい活動を取り入れたいと考えた。そこで取り組んだのが“What’s the matter?”ゲームである。まず、各班1名ずつの解答者が係のジェスチャーを見て状態を当て、その状態を表す挿絵をはえたたき棒で素早く押さえるというゲームである。「見る」「聞く」「話す」の3つのことを連続して進めることができる活動であると考えた。

子どもたちはゲームが始まるやいなや、夢中になって上記の3つの「見る」「聞く」「話す」ことに取り組んでいた。まず、「見る」については、ジェスチャー系の動作や表情を真剣に見つめながらどんな様子なのかを読み取ろうとしていた。次に「聞く」については、「自分は何と尋ねられたのか」「相手は何と答えたのか」を聞き取ることが重要になってくるので、聞き漏らすまいとする緊張感とともに、楽しみにしながら相手の言葉を待っている様子が見られた。

「話す」については、3年生と4年生とではやや様子が異なっていた。3年生は、ゲームに夢中になるあまり、早口になったり、“Are you happy?”を“I’m happy?”と尋ねたり、“Yes, I can.”と答えたりするような場面もあった。ゲームで勝つことが大きな目的になってしまい、相手にきちんと伝えようとする意識があまり高くないため、当然「話す」ことを楽しむまでには到っていない子が多かった。表3のS児のように、ゲームは楽しかったが、会話はうまくできなかったというふりかえりが3年生には多かった。

4年生は、ゲームに夢中になるのは3年生と同様であるが、正しく伝えようとする意識は3年生よりも強かった(表3)。また、3年生の表現について「・・・だよ」というアドバイスを送る姿も見られた。勝敗だけにこだわるのではなく、きちんと言えたことに拍手をしたり、笑顔を送ったりする子どもも増えてきた。こうした4年生の姿を広めていくことによって、落ち着いた、「見る」「聞く」「話す」を楽しめるようになっていくと考える。

ふり返りの内容	3年・D児	3年・E児	4年・F児	4年・G児
①今日の英語は楽しかったか	ジェスチャーゲームが楽しかった	特にはえたたきを使ったゲームが楽しかった	どきどきしたのがとても楽しかった	英語で答えてはえたたきでたたく所
②会話をうまく言えたか	発音をうまく言えた	そんなに会話はうまくありませんでした	伝わったのでいいかと思えます	大きな声ではっきり言えました

表3 子どものふりかえり2



#### ④ 文字の並び方に注目して単語を読む

文字の並びを意識しながら単語を読もうとする

続いて、本テーマのキーワードを文字の並びを見ながら読む活動に取り組みさせることにした。ここで扱う言葉は前時の6つに“ANGRY”“THIRSTY”を加えて8つとした(資料2)。なお、今回表記に使ったのは大文字である。これは、ふだん街で見かける英語表記の看板などは大文字が多いこと、毎時間アルファベットの発音練習に使っているカードが大文字であることなどから、初めての文字学習で扱うのは大文字が適切だと考えたからである。

4年生は昨年色を表す言葉などを文字で読む学習を経験しているが、3年生にとっては初めてのことである。従って、比較的文字数の少ない言葉を3年生にまず考えさせることにした。言葉の綴りを全て正しく当てさせるのは難しいので、ALTの発案による、ゲーム感覚で楽しく綴りを完成させる「ONIゲーム」(活動計画「どうしたの2」参照)で取り組ませた(写真3)。

まず、3年生にイラストを指し示しながら、“HOT”を予想させた。すると“H”“O”“T”とはずれることなく全て正しい文字を予想することができた。これは現在学習中のローマ字による表記と大差がなかったことによるものと思われる。

HOT	HUNGRY
HAPPY	SLEEPY
SAD	TIRED
ANGRY	THIRSTY

資料2 本学習で扱う言葉

既にローマ字学習をすすめている4年生には、“THIRSTY”を予想させてみた。英語では、発音と表記が一致しないことが多いため、“T”“H”を難なく予想できたのはすばらしかったものの、“I”でつまずき、この1文字を残して9回連続で予想が外れた。最後にA子が正解の“I”を予想し、みんな大喜びでA子に拍手を贈った。このことで「みんなで考えて完成させたぞ」という雰囲気をつくることができた。「なぜ“I”なのか」という疑問が出るかもしれないと考えたが、4年生は、英語の文字の並びをローマ字表記と同じようにとらえているわけではなく、むしろ「へえ、ここは“I”なのか」というような自然なとらえ方をしている様子であった。その後、他の6つの言葉を文字で読む練習をしたが、どの言葉についても文字を見ながら元気な声で発音練習することができた。

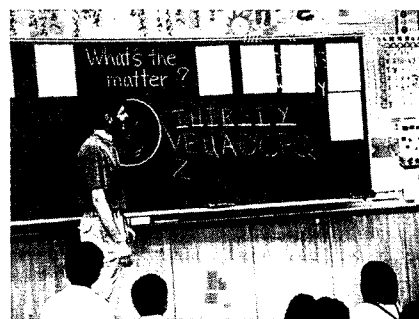


写真3 ONIゲーム

#### ⑤ 文字の並びを意識しながら会話を楽しむ

「聞く」「話す」「読む」ことを楽しんでいる

これまでの学習を生かし、文字を意識しながら会話をする活動として取り組んだのが、「6人をさがせゲーム」である。(活動計画「どうしたの2」参照)これまでの「聞く」「話す」「読む」が全てそろった上で成り立つゲームである。自分がカードを減らしていくためには、注意深く聞き、必要な言葉を話し、カードを選ぶために文字の並びを読まなくてはならないからである。ここでもALTとHTはデモンストレーションを行った。その様子を子どもは真剣に見つめていたことからゲームに対する関心の高さがうかがえた。

3年生は、少し緊張しながらも、相手を見つけては自分から進んで声をかけて会話を始めた。最初は、言葉がすぐに出てこなかったり、聞き取れずに聞き直したりしていたが、何回か進めるうちに言葉がすらすらと出てくるようになってきた。また、だんだんカードが減っていくため、それが励みとなって声も大きくなってきた。カードのやり取りが成立するとうれしそうで、にっこり笑いながら手を振って別れる場面も見られた(写真4)。

4年生は、3年生よりもさらに落ち着いた様子で取り組んでいた。特に3年生との会話では、相手が考えているのを笑顔で見守ったり、言葉を補ってやったりする姿が見られた。会話が最後までしっかりと通じると、そろったカードをうれしそうに箱の中に入れていく表情がとても印象的であった。少しずつだが、会話そのものを楽しむ姿が見られるようになってきている。

ALTとHTも中に入ってゲームに参加した。ALTは、子どもがきちんと最後まで正しく発音をしているかを確認しながら見て回

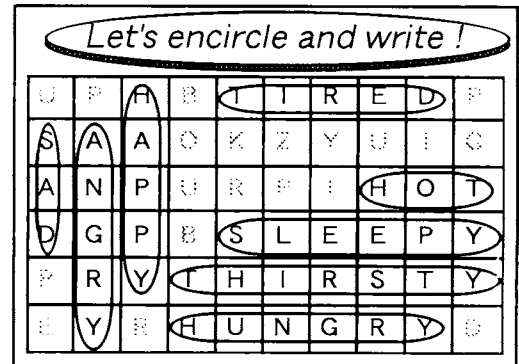


写真4 6人をさがせゲーム

り、必要に応じてアドバイスを送った。HTは、普段会話することに自信が持てない3年生を中心に、言葉を補ったり、正しく言えたことについて褒め励ましたりしながら様子を観察した。読むために文字に視線がいきまわってしまい、相手の表情をしっかりと見ないまま話したり、聞いたりしてしまっている子どももいたが、全般に表情が明るく会話を楽しんでいるように感じた。このような会話場を設定することによって、だれとでも会話を楽しめるいい機会になったのではないかと考える。

### ⑥ 文字の並びを見つけてなぞる

学習の終わりにもう一度文字を意識して読んだり、書いたりする場面を設定した。まず、ランダムに並んだアルファベットの表の中からキーワードの文字の並びを見つけ出して、その並びを囲む活動を行った。パズル感覚でできるため、どの子どもも意欲的に取り組むことができた(資料3)。結果を見てみると3年生、4年生ともにほとんど正しく囲むことができていた。その後、囲んだ文字をなぞり書きさせた。文字を書く最初の段階として、無理なく取り組む活動としては効果的であった。授業後、「文字についても勉強することができて楽しかった」という達成感を述べる子どもも何人かいた。



資料3 文字学習用のワークシート

### (6) 本学習をふり返って

本学習を子どものふりかえり(表4)をもとに見てみると、ほぼ全員が「楽しかった」と記している。その理由として挙げられるのは、まずゲームがおもしろかったということである。今回のゲームが成立したということは、相手を意識したり、意欲的に人とかかわってコミュニケーションを楽しめるようになりつつあることを示していると考えられる。ALTの発する言葉を理解しながら、それを使って相手の状態を自分なりに理解しようとする姿を「規範」としたとき、徐々に身につくようになってきている。次に、3年のI児や4年のK児が書いているように、「教え合い」ができたことを挙げている子どもも数人いた。小グループでの活動に関して、「教えてもらって自信につながった」「伝えたり、教えたりすることができた」「自分の学びをふり返ることができた」などの感想が出ていた。これらのことから、集団で学ぶよさが発揮され、相手を意識し、理解しようとする姿につながっていたと考えられる。

ふり返りの内容	3年・H児	3年・I児	4年・J児	4年・K児
①今日の英語は楽しかったかについて	今日はゲームが多く楽しかった	今日は教え合いなどが楽しかったです	ゲームで学ぶと楽しい	とても楽しかった 先生がたくさんいるけどいつも通りがんばれた
②英語の言葉を字で読むことについて	少し読めないところもあるけど(だいたい)読めた	ちょっとむずかしかった Rがついたの読み方になってしまった	だいぶわかってきた	ぜんぜん読めなかったけど(最後には)読めた
③感想	今日はおにのゲームが何回かあって楽しかったです	ゲームではほかの先生方がたくさんかしてくれましたので楽しかったです!	いろいろおぼえられた	はんでやると まちがっているかもしれない子に教えてあげられる

表4 子どものふりかえり3

文字の並びを読むことに関して、4年生は8割の子どもが「だいたいできた」と答えた。今回は無理なく取り組めたのではないかと考えている。一方、3年生は、「少しむずかしかった」と回答する子どもが多かった。文字学習における学年の差は大きいのは当然のことで、発達段階を考慮して学年別の活動をできるだけ多く設定していく必要がある。

評価に関しては、活動ごとの教師の子ども様子の観察、ワークシート、授業後に記入する自己評価カードをもとに行ってきた。自己評価カードについては、やや漠然とした項目であったので、会話を楽しむことに関しての意識をつかむために観点をもう少し絞ればよかったと反省している。また、「より豊かな表情で正確に発音できるとよい」というALTの評価を今後の指導に反映させていくことも大切である。これからも会話を通して「集団で学ぶよさを生かした」英語学習をめざしていきたいと考えている。